永井幸太郎物語

「日商」創立時代
〝Small,slow but steady〟

大塚　融
（NHK大阪放送局報道部記者）

……「殊ニ昭和二年、春、鈴木商店ノ破綻カラ財界ノ大恐慌トナリ、其整理カラ日商株式會社創立迄、寧日ナク、心モ落着カナカッタノデ、父ノミナラズ、當時既ニ病ンデ居タ、母モ省ル暇ガ無カッタ、洵ニ残念ニ思フ。……」（永井『吾が父』昭和七年一月刊）

昭和二年の永井は、焦眉の急・鈴木商店の整理のために私生活をまったく投げうった。三月二十六日夕方、大阪支店で台湾銀行から貸し出し打ち切りの通告を受けた永井は、善後策をとるため、その足で上京した。実は、八日後の四月三日（日曜・神武天皇祭）に、金子直吉を裏で支えてきた「鈴木」元本店支配人・故西川文蔵の次女と二十七歳の青年社員・西川政一（旧姓須原・後に日商岩井社長）との結婚披露宴が神戸で予定されており、永井夫妻はその月火氷人役を引き受けていた。しかし「鈴木」の事態はすでに信用を失っていた金子の手には負えず長年国内にいて、実務に詳しい永井が中心となって処理するほかなかった。永井の東京滞在は長引いた。永井は「鈴木」破綻が確実となった四月二日、やむをえず神戸の西川に電話して、「あす（三日）は戻れない」とわびた。こうして、西川の結婚披露宴は永遠に中止された。

四月四日朝七時、やっと永井は大阪に戻ることができた。この日、「鈴木」の支払いと新規取引が停止となり、ついに破綻した。借金実に五億円、当時の政府予算の四分の一にも当たる巨額であった。この日はまた、永井の四十回目の誕生日でもあった。無論祝う余裕はなかったに違いない。

「鈴木」は金子直吉あっての「鈴木」であった。永井は、金子の旺盛な事業欲と個人としての無欲恬淡に多くを学んだ。金子の死後六年経った昭和二十五年、永井は次のような金子評を書いている。

「金子翁は常に口にせし如く生産報国の大目的は十分に成功を納めたるものと言うべく、仮りに昭和二年の恐慌に堪ええて鈴木の傘下にこれらの事業を一財閥の下に把握し得たとしても終戦後財閥解体の運命に立ち至りしなるべく……」（傍点筆者）

永井は金子を貿易人としてよりも、神戸製鋼所や帝人などを手がけた工業的手腕を高く評価している。（ちなみに高畑誠一は、日清・日露・第一次大戦と不況のたびに運よく戦争が起きたことが金子を強気一点張りにさせてしまったと嘆いている）

岩井商店も、第一次大戦景気で急成長したが、戦後すばやく商いを縮小して、昭和恐慌を乗り切った。「鈴木」＝金子とは対照的である。

俳号片水・金子直吉が昭和二年四月、東京の常宿・東京ステーションホテル二十号室を立ち去る際、詠んだ句がある。

落人の　身を窄め行　時雨哉

当時永井に仕えていた社員故・田所繁治日記の昭和二年四月三十日付には「四月一杯実ニ多忙ナリキ」と記してあり、後年の付記で「この四月中、永井さんは殆んど不眠不休で東京大阪を往復されましたが、まだこれがずっとつづいて御自分が御病気になったり、お子様がなくなったりします」と添え書きしてある。

「鈴木」破綻は、四月二十一日までに全国三十七銀行が休業に追い込まれるほど、すさまじい金融恐慌を招いた。この金融恐慌がもたらした社会不安を目の当たりにして、永井は「倒産」がもたらす企業の社会的責任の深さを痛切に感じた。それだけに、倒産後の債務者への整理と、残された一千人の社員の身の振り方に全身全霊を打ち込んだ。ほとんど無給で働く毎日が続いた。

次男・昌（まさ）を疫痢で亡くしたのも、そうした日々が続く七月五日午前六時のことであった。わずか一年八カ月の命だった。張りつめた心が予感したのか、直前に上京する際、いつになく門口に立ってじっと見送る昌の姿が妙に心に残っていた。永井は静かに愛息の葬儀をすませたあと、三日後には再び上京する忙しさであった。「私」よりも「公」に殉ずる明治人の気慨であろうか。

「鈴木」残務整理の目鼻がつくと、世界貿易の実務に長けた「鈴木」の多くの人材やせっかく確保した国際的な商権を黙って離散させるのは、「鈴木」関係者には惜しまれた。こうして「鈴木」脱皮のホープ永井・高畑コンビが、新会社設立のため本格的に表舞台に登場することになった。二人とも貿易実務に堪能であり、しかも若く人望があった。二人が立てばついてくる。二人は、例えば永井をナタとすれば、高畑はカミソリに例えられるように対照的な性格である。が、それが故に、かえってよくウマが合った。

永井が専務をしていた旧「日本商業」を整理して、台湾銀行へ返すべき債務を新会社への出資金に振り替えてもらったり、東京海上社長・各務謙吉の同情出資十万円を得たり、周囲の好意に支えられ、「鈴木」残党三十九人による「日商」株式会社の設立は決まった。昭和三年二月八日、大阪中之島・日本銀行大阪支店西側の江商ビル四階で新会社の創立総会は開かれた。代表して常務・永井があいさつに立った。「新天地で理想社会を築こう」と、メイフラワー号の清教徒の故事に自分たちの門出をなぞらえた。外では、幅七～八メートルの御堂筋の本格的な拡張工事が始まったばかり、この十カ月の悪夢をぬぐうかのように空は高く澄んでいた。

〝Small,slow but steady〟（小さくても堅実に）――

資本金百万円という「鈴木」の八十分の一の規模が、新会社の理念を象徴していた。「鈴木」倒産はさまざまな社会的悲劇を

もたらし、永井自身も私生活に手ひどい犠牲を強いられた。企業経営は個人の趣味的采配で動く〝家業〟であってはならなかった。永井は高畑とともに、この経営理念を社員に向けて口を酸っぱくして説いた。永井は決して能弁ではなかったが、誠実味のある話し方で、誰からも信頼されていた。シャープで、いくぶんせっかちな決断を下す高畑をたてながら、永井はじっくり情勢をみて大胆に決断し、新生「日商」は〝堅実経営〟をモットーに、着実に業績を伸ばしていった。

当時の永井の人柄をしのぶエピソードがある。加集益蔵（後に三菱レーヨン社長）が、「鈴木」残務整理に当たっていた昭和四年、倒産した合同毛織の更生会社の発起人になる必要に迫られた。加集は個人で株を持たねばならなかったが、一万五千円がなかった。ほとんどの人が「もうかるんでしょうね」と担保をとって貸そうとするなかで、永井は「思惑ではないんだね。君は重役になるんだね」と念を押すだけで、担保も取らず貸してくれた。「これほどの人格者がいたことが日商に幸いした」と加集は後に回想している。

昭和四年秋に始まる世界恐慌も「堅実主義ヲモットトーシテ総テニ当リ」（昭和五年後期営業報告書）利益を計上でき、永井も次第に家庭を省みる余裕が出てきた。一男三女の子供たちを奈良ホテルまで連れていって、洋食のマナーを身につけさせたり、夏は垂水海岸や天の橋立に必ず避暑に連れていきながらしかも自らには質素な暮らしを課していた。子供たちには寡黙で潔い父親が、大黒柱として頼もしかった。昭和六年十一月二十三日、永井の敬愛する父・長造が八十八歳の大往生を遂げると、『吾が父』という思い出の記を執筆、出版した。これを手がかりに永井の育った環境をたどってみる。

永井は明治二十年四月四日、兵庫県氷上郡山南町下滝という丹波の山奥の、豊かな農家に生まれている。この氷上郡からは西川政一や戦後の首相・芦田均、現代議士・田英夫の一族などが出ている。「父ハ決シテ世俗ノ所謂偉イ人デハナイ、有名ナ人デハナイガ、誰ニモ憚カラヌ、立派ナ、真直ナ純真ナ一生を送ッタ誇ル可キ人デアル」。永井はこの父・長造の二宮尊徳のような勤勉な性格と母の用心深い性格を受け継いでいるという。この自らを評した性格は、永井自身の人間像を暗示する。父・長造は「死ニ金ヲ費フナ」と「受判ヲスルナ」を繰り返し子供たちに言い聞かせた。永井の中学時代まで、一日十銭で田草取りや米つきをする日雇いが家に来ていたが、永井は都会へ出てからもこの光景を思い出しながら、乱費（父ノ所謂死金ヲ費フ事）を戒めていた。また「受判（他人の債務の保証）」は、自分の持っていないものを貸すようなもので、「ツイ、ウカウカト、自分ノ力以上ノ金ノ受判ヲ心易クスル事」が危険なのである。永井の温かい思いやりと慎重な決断の根拠をうかがうことができる。

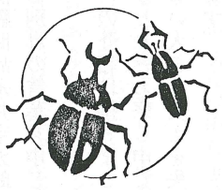
父・長造は、子供たちが学資を遊学先から催促してくると、「彼等ハ死金ハ使ハヌカラ、言フテ来タヨリ五円位多ク送ッテヤレ」という慈愛深い人であった。こうして永井は、ひと山向うの柏原中学校への通学や神戸高商での下宿生活を心から楽しむことができた。「鈴木」入社後五年、大正三年三月五日、永井は同じ氷上郡の小川村出身・村上たけのと世帯を持った。幸太郎二十六歳、たけの十八歳の時である。しかし、永井のペテルスブルグ（現レニングラード）駐在など外国駐在が続き、しばらく別居生活が続いた。

「日商」経営も軌道に乗った昭和七年夏、長い借家生活から足を洗い、神戸・御影（現・東灘区住吉山手）の三百坪の土地に終生の居宅を構えた。近くには盟友高畑の居宅があった。二人はゴルフに、談笑に、頻繁に往き来した。永井が高畑の前では格別に心を開いていることは、永井の長男・弥太郎の子供心にもよくわかるほどだった。この年は、世界恐慌にめげず、内部留保に努力した結果、長い間の重石であった「日商」の台湾名儀の株式を買い戻すことができた年でもあった。「日商」もやっと一人立ちできるようになった。翌八年から定期的な採用が始まり、社内に清新な空気があふれていた。

この八年四月、創立五周年記念旅行で、五十人近い社員で鳥羽湾をめぐった。永井にとっても心安まる旅行であった。「庭の片隅にブランコがあった。宿舎に背を向けて、渺渺と暮れて行く春の海を眺めながら、永井幸太郎はゆっくりブランコを漕いでいた。

――鈴木の破綻から永井の労苦をつぶさに知っていた社員の一人は、（略）まるで子供のようにブランコを漕いでいた永井の背中が、あれほど大きく感じたことはないと語ってくれたのである」（『日商四十年の歩み』二四三頁　小堀鉄男執筆）

永井に訪れたこの安らぎも、一陣の風にすぎなかった。戦争が丸ごと永井を呑み込んでいくのである。



俳句

藤の棚　柳田義一

沢蟹の逃げる場所無き須磨の浦
木下闇透けて見えざる母心
行商の汗の滴や草鞋銭
血膨れの藪蚊のあたま叩かれず
四月馬鹿白い鴉が蛇を呑む
子午線から抜ける慧星天文台
道連れの放浪の旅から黴の宿
椿踏む踏まる、椿もの言わず
白雲を紫で染め抜く藤の棚

稲荷山　金子貞子

アルバムに旅を想わす初哄い
母想う夜長の肩に虫すだく
小春日や万本鳥居稲荷山
日だまりの縁に膝組む冬座敷
南天の葉まで染めてる山の宿
ひたすらに春竣つ素肌草の鉢

鈴木岩蔵氏二女

箱根細工　松田大介

牛の産祝ふ八十八夜かな
神苑の菖蒲は姙を誘らざる
をしみなく那須は晴れ閑古鳥
甚平着て箱根細工の主ぶり

幾山河　隅田栄

宝塔に佇ち都離れて春惜しむ
うら、かさ僧玄峰は何を説く
深みどり南紀に想う幾山河